

第 16 話 ジャニーズ映画の時代

●80年代の青春アイドル

薬師丸ひろ子の初主演作『翔んだカップル』で相手役となった鶴見辰吾は、人気テレビドラマ「三年 B 組金八先生」79 で同級生を妊娠させてしまう生徒を演じて話題となった。富田靖子との松竹『ときめき海岸物語』（84 朝間義隆）、堀ちえみとの東宝『潮騒』（85 小谷承靖）では主演をしている。

鶴見演じる男子生徒の子を孕み出産する「十五歳の母」となる女子生徒を演じた杉田かおるは、東映『青春の門』（81 深作欣二、蔵原惟繕）、『青春の門 自立篇』（82 蔵原惟繕）で主人公・信介の恋人・織江役に起用される。

また、同じく生徒役には小林聡美もおり、尾美としのりとの松竹『転校生』（82 大林宣彦）に主演した。

この 79 年の「三年 B 組金八先生」第 1 シリーズの生徒からは、現在も演技派として息長く活躍しているこの 3 人だけでなく、青春アイドルも複数出現している。

不良少女役が印象的だった三原順子（現・じゅん子）は、80 年「セクシー・ナイト」で歌手デビューし、82 年「ホンキで Love me Good!!」で紅白歌合戦に出場した。映画では『人形嫌い』（82 日高武治）に主演したほか、後述の『ハイティーン・ブギ』、『あいつとララバイ』にも出演している。現在は自民党参議院議員となり、最近の「八紘一字」発言で波紋を生んだのは記憶に新しい。

●たのきんが映画界をも席卷

しかし彼らより爆発的人気を誇ったのは、田原俊彦、近藤真彦、野村義男の「たのきんトリオ」（田原の「た」、野村の「の」、近藤の「きん」）である。

田原俊彦（トシちゃん）は、80 年「哀愁でいと」で歌手デビューし、たちまち人気者となって、その年のレコード大賞最優秀新人賞を受賞するとともに紅白歌合戦に初出場、86 年まで 7 回連続で出場している。

近藤真彦（マッチ）は 80 年の年末に「スニーカーぶる〜す」で歌手デビュー、翌 81 年の「ギンギラギンにさりげなく」でレコード大賞最優秀新人賞受賞、紅白歌合戦に初出場して 88 年まで連続 8 回出場している（96 年にもう一度出場）。

野村義男（ヨッちゃん）はギタリストとして活躍し、歌手デビューは 83 年、4 人組のロックバンド The Good-Bye としてだった。デビュー曲「気まぐれ ONE WAY BOY」で 83 年度レコード大賞最優秀新人賞を受章している。

「たのきんトリオ」として 3 人で活動することが多かった彼らは、映画でも常に共演し

た。東宝が製作したデビュー作『青春グラフィティ スニーカーぶる〜す』（81 河崎義祐）では、それぞれ歌手、カメラマン、野球選手を夢見る定時制高校生、『ブルージーンズメモリー BLUE JEANS MEMORY』（81 河崎義祐）は横浜の港を舞台にコンサートを開こうとする三人組を演じている。この 2 作では近藤が主題歌を歌い、主演者としての役割を担っていた。

ニューヨーク、ロサンゼルスでロケを敢行し 82 年の東宝お正月映画となった『グッドラック Love』（81 河崎義祐）では、田原が主題歌を歌い、「田原俊彦主演第一回作品」と銘打たれている。三浦友和主演の青春映画などで力を発揮してきた河崎監督が、3 作目とあってトリオ各個のキャラクターを十分に掌握し、持ち味をうまく発揮させてファンを楽しませた。

82 年の東宝お盆興行を飾った『ハイティーン・ブギ』（81 舛田利雄）は、それまでの加山雄三、薬師丸ひろ子、ビートたけしといった人気者主演作と組んだ 2 本立番組と違い、オリジナル S F アニメが併映で、事実上 1 本で番組を背負う人気ぶりだった。上映時間 2 時間 10 分という大作だ。今度は近藤が主題歌を歌って主演している。日活で石原裕次郎の主演作を多数手がけた舛田監督によって、近藤に裕次郎のイメージを付与しようという狙いがあったようだ。人気漫画の映画化で、3 人は暴走族、強姦やそれによる妊娠といった重い要素も入っていて、裕次郎には及ばぬものの近藤もなかなか健闘した。

83 年の東宝お正月映画『ウィーン物語 ジェミニ・Y と S』（82 河崎義祐）は、「野村義男主演第一回作品」である『三等高校生』（82 渡辺祐介）との 2 本立で公開された。両方とも「たのきん」映画である。野村だけが出演し、中高校生向けの「ジュニア小説」を映画化した軽い話の后者に対し、前者は題名通りウィーンをはじめヨーロッパでロケした豪華版だ。主演は田原で、なんと、ウィーンに赴いた音楽留学生と、彼地の名家の御曹司であるオーストリア日本ハーフの青年の二役（！）を演じている。

名家のお家騒動に巻き込まれた音楽留学生は、ウィーンでパティシエ修行中の親友（野村）、ヨーロッパ一人旅の途中で御曹司の日本語教師を頼まれた青年（近藤）の力を借りつつ陰謀に立ち向かう。日本と往復しての家宝の楽器争奪戦、古城に囚われたカップルの奪還などの派手な展開の中、音楽留学生と御曹司が生き別れになった双子の兄弟と判明する荒唐無稽とも思える物語を通して、3 人それぞれの魅力を引き出し、彼らのファンに夢を与える。

大方の映画ジャーナリズムからは「お子様ランチ」以前の稚拙なものと思われていた「たのきん」映画だが、当時のわたしたち 30 歳前後の若手映画評論家は、その面白さを懸命に伝えようとしていた。キネマ旬報の日本映画批評欄で北川れい子が『グッドラック Love』を、秋本鉄次が『ハイティーン・ブギ』を評価し、わたしは『ウィーン物語 ジェミニ・Y と S』をこう評した。

【映画は原則として映画館で観る、というのを信条にしているのだが、本誌ベスト・テンの締め切りに間に合わせるため、珍しく試写室を利用した。可能な限り数多くの作品に接した上で選考したい、と考えているからだ。おかげでいち早く、狭い試写室の小ぶりの画面の中ではあったものの、なんとも楽しい映画の〈夢〉の世界に遊ぶことができた。”たのきん”主演ものという典型的なスター映画の形式をとりながら、この「ウィーン物語／ジェミニ・YとS」は一刻のすばらしい〈夢〉を見せてくれる。

もちろん、それは、ウィーンを中心とするヨーロッパの風光明媚な異国情緒によるものでなければ、古城が舞台の相続争い、国籍を異にした混血の双生児兄弟、等々の物語設定によるものでもない。外国ロケを盛大に行おうと、四半世紀以上も前の少女漫画のようなお伽話をこしらえようと、少しも観る側に〈夢〉を与えてくれない例は、いくらでも転がっている。

ここにある〈夢〉は、描かれた事象の非日常性でなく、映画そのものが有している非日常性に由来している。そもそも、暗闇でスクリーンと向かい合い、光と音で構成された虚像と接する行為自体、〈夢〉の要素を含んでおり、一定の上映時間のあいだ、その虚構の世界に惹き込まれれば、〈夢〉を見たことになるだろう。子供の頃のチャンバラ映画、学生の頃のやくざ映画などには、〈夢〉に酔わせてくれる作品が多々あったものだ。

河崎義祐監督以下「ジェミニ・YとS」の作者たちは、まず”たのきん”のスター映画である点を、照れずに前面に出す。田原俊彦、近藤真彦、野村義男それぞれに見せ場を用意し、筋立てに理屈を通すのより、彼らの個性や肉体の魅力を発散させることを優先する。その結果、特にファンではないものをまで楽しませてくれるほど、全盛のスターのみが持つ勢いと輝きで、全編を満たす。速いテンポの演出も軽快だし、呆気にとられる超ハッピーエンドには、好意的な哄笑をあげてしまった。

同じ河崎監督の「グッドラック Love」(81) から、日活調から舛田利雄監督の「ハイティーン・ブギ」と、一作ごとに上昇を見せてきたこのシリーズの持ち味が、うまく結実している。最後に出るクレジット・タイトル間、映画のハイライトを少しずつ映し出してみせるのだが、ここで、いくつかのカットに、本体では当然では削られているカチンコと、それが鳴る前の“たのきん”の自然な表情を入れる。この“お遊び”も、単にひとつの趣向というだけでなく、スター映画なる虚構と、現実との区別を感じさせ、効果的だ。それまで繰り広げられた作品世界が純然たる〈夢〉だったことを示す終止符になっている。

ただ、この〈夢〉に浸り込めなければ、逆に、全編が馬鹿馬鹿しい茶番としか思えまい。実際、試写室内を支配していたのは、冷笑のようだった。ファンに代表される熱狂的歓迎とそのスターを嫌悪する者に代表される蔑視や黙殺の両極の反応を受けるのがスター映画の宿命でもあろう。それでも、〈夢〉を見ることができた自分の幸福を、素直に喜びたい。もう一度、今度は“たのきん”ファンの女の子たちで一杯の映画館へ行って、観るつもりだ。】

(キネマ旬報 1983年一月下旬号)

●たのきん映画の最終作

東宝 83 年のお盆興行では、2 時間 12 分の大作『嵐を呼ぶ男』（83 井上梅次）が登場した。これと、田原俊彦デビュー 4 周年を記念した東京宝塚劇場公演の記録フィルム「たのきん」にシブがき隊、少年隊など弟分グループも総出演の短編記録映画の 2 本立ジャニーズ系づくしの番組である。

『嵐を呼ぶ男』は、言わずと知れた石原裕次郎の大ヒット作（57 井上梅次）の、渡哲也主演作（66 舛田利雄）に続く 2 度目のリメイクである。裕次郎、渡が演じた主人公を『ハイティーン・ブギ』でも裕次郎に擬せられた近藤が演じ、ここではロックバンドの新進ドラマーになる。田原がメジャーに移籍したそのバンドの元ボーカル兼ドラムス役で、2 人のドラム合戦や対立と和解が描かれ、近藤と田原の場面が中心で野村は蚊帳の外めく。

84 年のお正月興行には『エル・オー・ヴィ・愛・N・G』（83 舛田利雄 脚・高田宏治）が少年隊主演の『あいつとララバイ』の 2 本立てで公開された。これに野村は出演せず、今度は田原が主役で近藤がそれに相對する。東映時代劇ややくざ映画を多数手がけ、直近では『鬼龍院花子の生涯』（82 五社英雄）、『陽暉楼』（83 五社英雄）で大ヒットを飛ばした脚本家・高田宏治のオリジナル脚本とあって、青春映画というよりは性行為や犯罪もからむ大人の映画になっている。

だが『嵐を呼ぶ男』、『エル・オー・ヴィ・愛・N・G』はそれまでの作品と比べ大幅に興行収入を落とし、「たのきん」映画はここで打ち止めとなる。わたしが書いた『エル・オー・ヴィ・愛・N・G』評は、図らずもこのシリーズの総括となってしまった。

【好きな映画のジャンルというものがある。自分自身、考えてみると、いわゆるアイドル映画など、好きな部類のようだ。“学芸会”とかなんとか言われても、結構楽しんで観てしまう。郷ひろみや山口百恵のような俳優としても相当の力量を持ったスターの作品はもちろん、単にアイドル・スターである人気に乗っかっただけの企画でも、それなりに面白く感じる。薄っぺらで貧弱なものかもしれないけれど〈夢〉が画面を覆っているのが好きなのだ。この作品の併映作、ジャニーズ少年隊主演の「あいつとララバイ」（井上梅次）だって、軽快な主題歌に乗った率直な展開が心地良い。「スニーカーぶる〜す」（81 河崎義祐）以来の“たのきん映画”も、少しも馬鹿にする気持ちはなく、見続けてきている。

「グッドラック Love」（81 河崎義祐）の田原俊彦演ずる少年の痛ましいまでのナイーヴさ、「ハイティーン・ブギ」（82 舛田利雄）のテンポのいい活劇調快さ、「ジェミニ・YとS」（82 河崎義祐）の底抜けの楽天性といったあたりが、印象深い。その最新作「エル・オー・ヴィ・愛・N・G」。舛田利雄監督と、この種の映画では珍しい高田宏治の脚本とが組んで、いままでとはいっふう変わった形の仕上がりとなった。

田原俊彦が”少年”ではなくなり”青年”として登場する。もはや、ナイーヴな精神だけのやわな若者ではない。したたかな面を有している。冒頭の部分で、糸くずがついていると偽って女性のお尻をぬけぬけと触ったりするところ、今までの”トシちゃん”とは全く違う。そして、年上の人、過去に影を持つ売れっ子デザイナーへの感情も、少年らしい憧れなどではなく、愛情のないまぜになった複雑なものだ。

この変身ぶりに符節を合わせるように、物語の方も、少女向けの単なるハッピーエンド・ストーリーから離れている。登場人物たちのキャラクターが、誰ひとりとして類型的でなく、そぞろ謎めいていて容易には把握し難い。そんな中、主人公と年上の女の関係も、一直線の愛情物語でなく、いつくしみと憎しみがあざなえる縄のように交錯した形で進行していく。結末、華やかなファッションショーという”宴”のあとに、二人が相対し、別れを告げる。込み入った後味を残す幕切れだ。

ただ、この意欲的な試みは、残念ながら必ずしも成功していない。田原俊彦、多岐川裕美・両主演者の表現力が不足なことなどあり、作者たちのせつかくの企図は、十分に生かされないままに終わってしまった。

しかし、他方で、強烈なカタルシスを与えてくれるのは、主人公の肉体の俊敏な動きだ。これまた踊りにはセンスのある美保純と組んでの踊りの場面での動きは、画面の中を席卷して、すばらしい。深作欣二監督「里見八犬伝」の真田広之、志穂美悦子の殺陣アクションといい、肉体の跳梁を正確にとらえた映像には、力感がみなぎり、見る者を圧倒する。この迫力だけで、「エル・オー・ヴィ・愛・N・G」は、魅力たっぷりだ。ドラマ部分の不調を補って、余りある。】（キネマ旬報 1984年二月下旬号）

その後3人はそれぞれの方向へ進む。

田原は歌手である一方テレビドラマで次々と主演作を出し、映画にも『瀬戸内少年野球団 青春篇 最後の楽園』（87 三村晴彦）、『課長 島耕作』（92 根岸吉太郎）に主演している。

近藤は歌手、俳優として活動する傍ら 84年頃からカーレーサーとしてレースに参加する。映画はアイドル歌手・中森明菜の唯一の主演作『愛・旅立ち』（85 舛田利雄）の相手役を務めたのが、主演者としては最後の出演である。

野村義男は音楽活動を中心に置き、いくつかのテレビドラマに出ただけで、その後映画出演はない。

●たのきんの次はシブがき

ジャニーズ事務所で「たのきん」のすぐ下に当たるのはシブがき隊だった。81年に「3年B組金八先生」の後継ドラマとして製作された「2年B組仙八先生」で生徒役の布川敏

和（フックン）、本木雅弘（モックン）、薬丸裕英（ヤックン）の3人で結成。82年「NAI・NAI 16（シックスティーン）」で歌手デビューし、2曲目の「100%...SOかもね！」をヒットさせてレコード大賞最優秀新人賞を受賞、紅白歌合戦への初出場も果たし、86年まで連続5回出場した。

映画デビューは「NAI・NAI 16」を主題歌にした『シブがき隊 ボーイズ&ガールズ』（82 森田芳光）である。「たのきん」映画が東宝の人気番組となっていたのに対し、シブがき隊映画は東映で上映された。全寮制男子高校の1年生3人組が寮を抜け出して、リゾート地に冒険旅行へ出かけ、地元の女の子たちと仲良くなる顛末を軽やかに描いた一篇で、これを作ったのが、前年自主製作の『の・ようなもの』（81 森田芳光）で注目された新進・森田芳光監督である。

『三等高校生』で先輩・野村義男の初主演作に花を添えたシブがき隊は、翌年夏、郷ひろみ作品などで定評のある山根成之監督の『ヘッドフォン・ララバイ』（83 山根成之）で再び主演した。駅伝をメインに据えた高校生青春物語である。79年にソニーが発売したウォークマンは大ヒット商品となり、それまで屋内で聴くものだった音楽が、外で楽しめるようになった。それに不可欠な付随装置がヘッドフォンだ。時代の先端を行く商品に、旬のアイドルを掛け合わせたのがこの企画だった。

ほとんどノンスターだった『ボーイズ&ガールズ』と違い、中野良子、寺田農、梅宮辰夫など脇を固める充実のキャストで、シブがき隊の人気上昇が反映されていた。山根監督は期待に背かず、巧みにフックン、モックン、ヤックン3人それぞれの魅力を引き出していく。

山根青春映画ファンのわたしは、うれしくて評を書いた。連載の第11回にも掲載したが、ここで再掲しよう。

【画面右下にタイトル。“ヘッドフォンララバイ”の文字が、五色に変化する。そう、山根成之監督作品だ。大林宣彦、相米慎二、森田芳光といった作家の映画が、ひとめで誰のものか解るくらいの個性を有しているのと同じく、山根作品も、独自のスタイルを持っている。ひさびさの登場、しかも、『五番町夕霧楼』（80）、『黄金の犬』（79）は“大作”映画だったから、奔放にやれる“お子様ランチ”映画は、何と『九月の空』（78）以来五年ぶりとなる。

“お子様ランチ”とは山根監督の自称するところであり、卑下しているのではなく、むしろ、少年少女を対象としたこの種の映画への愛情がこめられた言い方だ。で、このシブがき隊主演の夏休み向け作品、水を得た魚のように、いきいきした映画作りを見せてくれる。同一アクションの反復とか、画面を分割しての表現とか、けれん味いっぱい表現を駆使する。ことに、歩行シーンの工夫が効果をあげている。

初めて酒場へ入り、オトナの美女と知り合った田舎出の少年が、同行のイラストレータ

一志望の少年に感激を語る帰途の描写。酒場のあるビルから勢いよく出てくるところを繰り返しながら、会話を進める。上気した状態で店を出た瞬間の姿を強調することで、少年の心理をうまく表わす。また、失踪した仲間を、残った二人が心配しつつ校内を歩く場面では、据えられたカメラの前を三度、右から左へ横切らせる。一度目。ひとりが話す。二度目。相手が応える。三度目。無言。これが、会話の巧みな間〈ま〉になる。そして、無言の部分は、字面では“……”と表記されるような沈黙を、的確に映像化する。

物語の方は、シブがき隊三人がチームを組んで出る駅伝大会をヤマ場に、軽快に展開する。舞台となる渋谷・公園通りや、少年たちの根城である洒落たペントハウスといった人工的な都会風景ともよく調和している。話の核となるのは、犬の美容師の卵である少女をめぐる、田舎出、イラストレーター志望、友人同士の葛藤だ。共に彼女を好きになり、橋渡し役をしようとしたはずの方が仲良くなってしまい、純情に片思いした眼鏡で九州弁の少年は、きっぱり断られ、ふられる。二枚目風と三枚目風の友人同士と少女との恋心の三者関係―山根“お子様ランチ”の名作『さらば夏の光よ』(76)が、すぐさま思い浮かぶ。

しかし、“夏の光”との訣別が語られた悲しい結末とは違い、こちらは最後まで明るさが保持される。唯一の肉親である母親が倒れたために、大学進学を断念して九州に帰る少年、それを見送る仲間たち、東京駅頭のラストシーンは、少しも湿っぽくない。三者関係のもつれが完全に解消したことを示すように、“また、会おうね！”出てゆく列車に向かって少女が叫ぶ。それから、各々自分の選んだ途を歩む有様が、エピローグとして示される。いわば、『さらば夏の光よ』という短調の曲を長調に転調した変奏曲だ。いちばん風采のあがない田舎出の少年に中心を置いて描いていく方法で、変奏に成功している。

同時に、シブがき隊のうちひとり地味なフックン・布川敏和をこのポイントとなる役につける試みで、集団アイドル映画の定石を破ってみせる。三人の比重を、たくみに均衡させ、スターである彼らの魅力をまんべんなく映像化する。今をときめく森田芳光監督の手がけた昨夏の『ボーイズ&ガールズ』に対しても、一枚上手なのを見せる。山根成之、健在だ。】(キネマ旬報 83 年八月下旬号)

シブがき隊としての主演映画は『バロー・ギャングBC』(85 和泉聖治)が最後となった。FM バロー・ギャングなる海賊放送のDJを務める高校生3人組が、教師や暴走族の妨害にめげず、大規模なダンス・フェスティバルを成功させるまでを描く。

シブがき隊は88年に「解隊」、その後は、それぞれ役者として単独で活動を続ける。布川、薬丸は映画やテレビドラマに脇役として出演したが、本木は『ファンシイダンス』(89 周防正行)に初主演して注目され、『シコふんじゃった』(92 周防正行)で日本アカデミー賞最優秀主演男優賞など多くの賞に輝く。その後も『双生児』(99 塚本晋也)、『おくりびと』(08 滝田洋二郎)などで俳優として高い評価を受けている。

●少年隊の2作

シブがき隊が歌手デビューしたのと同じ 82 年に、「たのきん」のバックダンサーとして結成されたのが少年隊である。錦織一清（ニッキ）、植草克秀（カッチャン）、東山紀之（ヒガシ）の3人組は、『あいつとララバイ』（83 井上梅次）で歌手デビューより早く映画に主演している。ただこれは、原作である、少年マガジン連載の人気漫画（作・楠みちはる）の筋を追っただけのもので、「たのきん」の『エル・オー・ヴィ・愛・N・G』の明らかな「添え物」だった。

85 年末「仮面舞踏会」で歌手デビューすると、たちまちシブがき隊を凌ぐ人気を博し、86 年から 8 年連続で紅白歌合戦出場を果たす。そんな中、人気作詞家・康珍化がプロデュース、原作、脚本、音楽プロデュースを手がけた『19 ナインティーン』（87 山下賢章）という SF 仕立ての主演映画が作られた。タイムパトローラーやヴァンパイアが活躍するファンタジーである。

少年隊は、現在もジャニーズ事務所に所属し、グループでの活動を続けているが、それぞれ単独でもテレビドラマ、舞台、映画に出演している。中でも東山は NHK 大河ドラマ「琉球の風」93 に主演するなど俳優として評価され、『山桜』（08 篠原哲雄）、『小川の辺』（09 篠原哲雄）など時代劇の主演作が多い。